

Active Learning の理論と実践に関する一考察
LA を活用した授業実践報告 (12)
A Study on the Theory and Practice of Active Learning
Report on the course supported by Learning Assistant #12

三浦真琴 (関西大学教育推進部)

Makoto Miura (Kansai University, Division for Promotion of Educational
Development)

要旨

春学期のオンライン授業では、LMS のみを利用した科目、LMS と Zoom を併用した科目それぞれに創意工夫を積み重ねた。いずれも学習パラダイムに則って学生の学習を創発することを目指したもののだが、これが奏功したのは LA が繊細で丁寧な支援をしてくれたからである。面接授業を原則としたために、春学期の蓄積を存分に使うことができなくなった秋学期においても、受講生の選択肢を可能な限り増やすなどの工夫を施したが、複雑で多様なチャンネルに LA が十分に対応してくれたおかげでつつがなく授業を展開することができた。今後は、オンライン授業における受講生の学習支援を LA 研修のテーマに加える必要があるだろう。

キーワード オンライン授業、学習パラダイム、ラーニングアシスタント、グループワーク /
Online learning, Learning Paradigm, Learning Assistant, Group Work

1. 春学期におけるオンライン授業の概要

1.1. 学生への連絡・通知

関西大学では2020年3月27日に2020年度の授業実施の基本方針が掲示され、新年度の授業は4月6日から4月18日の間は原則として休講とすることが決められた。この決定の背後に春学期はオンラインによる授業が実施されることを読み取り、4月1日から三日間にわたって、教員と学生を対象としたオンライン授業に関する個別相談会やセミナーを教育推進部教員・CTL事務局職員・CTL研究員が企画・開催した。筆者にはオンライン授業の経験はなかったし、LMSを利用したこともなかったため、セミナーや個別相談会において、十分な対応ができるとは考えられなかった。

とはいえ、筆者は新年度の授業がオンラインによって実施されることをかなり早い段階で予測していたため、LMSのコンテンツは全科目15回分を既に作成済みであった。これを利用した授業の展開こそ経験していなかったものの、コンテンツ

を作成しながら気づいたことが幾つかあり、それを教員や学生に伝えることにした。

個別相談会の準備を進めるとともに、受講生には早い時期の連絡を心がけるようにした。春学期の履修登録の終了後ただちに全受講生に向けて、インフォメーションシステムの講義連絡機能を介して、春学期の授業はLMSを用いて実施することを伝えた。その際、LMSの使い方を簡便に説明した自作のパワーポイントのスライドをpdfファイルに変換したものとpdfファイルを読み込むための無料ソフト(Adobe Acrobat Reader DC Installer)を添付した。新入生の中にはpdfファイルに馴染みのない者がいるかもしれないと考えてのことである。

実は学生が最も望んでいたのは、LMSの使い方を伝えるサイトへのアクセスの仕方であることが、その後の相談会における学生の反応からうかがい知ることができた。筆者自身も、そのサイトの存在に気づくのにかなりの時間を要したが、コンテンツを作成しながら、自分なりに使い方を把握で

きるようになっていたので、学生向けの説明ファイルを作成することができた。LMS を使うオンライン授業に精通していなかったからこそ、これを初めて利用する人の不安や不便を慮ることができたのである。このような配慮は多くの学生の心に届いた。以下は LMS のメッセージ機能によって受講生から届けられた声の一つである。

「私は、入学してすぐで、講義の仕組みも理解できていなくて、機械に疎いため、オンライン授業がとても不安でした、他の講義では当日にお知らせが届くことが多くありました（明日の講義のお知らせもまだ来ていません）。しかし、この講義では履修登録後すぐに授業内容やオンライン授業方法を LMS で見ることができ、プロジェクト学習1についての不安はないまま、今日の第1回目を迎えることができました。チャットを使う、Zoom を使うといったこともタイムラインに載せてくださっていたので、どこを開けばいいのかという疑問もなく、スムーズに入っていました」

1.2. 多様な春学期の授業形態

筆者は表1に示す6科目を担当した。このうち3科目でグループワークを、2科目では一部でペアワークを展開した。残る1科目はLMSによるオンデマンド型の授業を実施したが、希望者とは

Zoom を使ったコミュニケーションを取ることにした。

LMS を利用する場合、オンデマンド型の授業が前提とされていたが、筆者は原則としてリアルタイムで授業に参加するように学生に呼びかけた。学生の生活習慣を守り、昼夜が逆転してしまうことがないようにするための配慮である。面接授業とオンライン授業が混在している場合には、オンデマンド型の授業に時間割通りの参加を呼び掛けるのには慎重を期さねばならないが、全員がオンライン授業を受けている春学期は、それが可能となった。

Zoom が導入されるまでは、タイムラインを使って学生に新たな指示を伝えるとともに、学生の書き込みを許可することで、常に学生の質問に応じられるようにした。どうしてもリアルタイムでの参加が困難な場合にはメッセージ機能を活用するようにと学生には伝えた。

音声によるコミュニケーションができない環境下、少しでも授業を楽しめるように、授業コンテンツとは別に、タイムラインにゲーミフィケーションの要素を盛り込んだ課題を出すこともあった。リアルタイムで授業に参加している学生は、授業コンテンツよりも、こちらの ad hoc な課題に一所懸命に取り組んでいたようである。

表1 2020年度春学期の授業形態の概要

科目名	受講者数	課題解決の様態	利用したツール等
教職概説	130	課題：パーソナルワーク	LMS リアルタイムでの利用を前提 希望者のみ Zoom ・「広場」の作成
作文プロジェクト	24	前半の課題：パーソナルワーク 後半の課題：ペアワーク	LMS+Zoom+Google ドキュメント・LAの活用 「通信」の作成
文章の達人を目指す	22	前半の課題：パーソナルワーク 後半の課題：ペアワーク	LMS+Zoom+Google ドキュメント・LAの活用 「通信」の作成
ねがいをかなえるプロジェクト	24	課題：グループワーク	LMS+Zoom+Google スライド・LAの活用 他の科目の履修学生の参観
クリティカルシンキング	23	課題：グループワーク	LMS+Zoom+Google スライド・LAの活用
ピアサポートのための クリティカルシンキング	41	課題：グループワーク	LMS+Zoom+Google スライド・客員研究員の参観 LAの活用

タイムラインの活用のほかに留意したのは、パーソナルワークを主軸とする科目において、必ず提出された課題へのフィードバックをおこなうことである。表中に示した「広場」「通信」とは、受講生が提出した課題を掲載して LMS に資料として提示するものである。100名を超えるクラスでは、受講生全員のレポートを掲載することは困難なので、他の受講生に読んでもらいたいものをピックアップし、それに科目担当者が必ずコメントを付すことにした。また、作文系の2科目では受講生の執筆した作品に科目担当者あるいは／ならびに LA が感想などのコメントを付した。このフィードバックは受講生に好評であった。その感想の一部を紹介する。

「オンラインではないときの授業がどういうものかわかりませんが、オンライン授業で良かったなと思ったのが、先生がまとめてくださる「教職概説の広場」で様々な人の様々な考えや意見を知ることができる点です。対面授業で意見交換をすることも良い刺激になったかもしれませんが、文字で書かれているものを見ることでより客観的に、そしてシンプルに他の人の意見を吸収できたような気がします。私は物事に対して視野が狭くなることもありましたが、教職概説の広場を読んで他の人の考えを知ること、同じ課題や題材に対して今までとは異なる見方をすることができ、また授業の回数を重ねるごとに視野を広げて課題に向き合えるようになってきたように感じます。教職や教育についてだけでなく、考えることや多くの視点から物事を見ることについても学ぶことができました。」

面接授業でも同様の「広場」は作成しているが、毎回提出される小レポートは手書きのため、その入力作業にはかなりの時間を割かなければならない。しかしオンライン授業で LMS に提出されるレポートはわざわざ入力する手間が省けたため、コメントをより充実させることができた。

1.3. LMS におけるグループワーク

このセクション以降は、主としてグループワー

クを展開するために施した工夫について言及する。

表1に示した3科目では、社会人基礎力の前提となる非認知能力の育成を目標としている。この能力の育成にはグループワークが適していると考えているため、毎期、グループワークを展開している。ところが春学期は面接状況のないところでグループワークを進めなければならなかった。どのようにグループワークをデザインするのか、それが初めてのオンライン授業における最初の課題であった。

いつもはグループワークトレーニング (GWT) として、他のグループのメンバー編成を手伝うグルーピングを実施するのだが (三浦, 2018)、誰とも対面していない状況では、それは困難であると考え、グループ編成は筆者が直接学生に伝えた。同じグループのメンバーだけが入室することのできるチャットルーム (掲示板) をグループの数だけ作成し、その中で情報を交換しながら、グループワークの課題に取り組んでもらうことにした。また、LA 全員に “Author” の権限を授与し、学生からの問い合わせなどに瞬時に対応できるようにした。さらに LA はいずれのチャットルームにも自由に入室できるため、その権限を最大限に活用し、1 時限内に必要に応じて複数のチャットルームを訪れ、必ずグループメンバーにメッセージを伝えたり、課題の解決につながるようなヒントを出したりしてくれた。そのおかげで、わずかに数回ではあったが、相手の顔が見えない状態の中でも、グループワークは順調に進んでいった。

2. Zoom 導入後のオンライン授業

2.1. LMS と Zoom を併用した授業の開始

Zoom の包括的契約が結ばれた後は LMS と Zoom を併用する授業方法が可能になった。LMS において提示した課題について Zoom のブレイクアウトルームを使えば面接授業に準ずるグループワークが展開できると考えていた。ところが当該学期の受講生は GWT を経験していないため、他者の学びを支援するというメンタリティの必要に気づいていない者もあり、順調にワークを進める

ことができないグループもあった。あるグループでは、ほとんどのメンバーがビデオをオフにしたまま、言葉を交わすことも少なく、一部の受講生だけがワークを進めようとしていた。反対に、同様にビデオをオフにしたままなのに会話が弾んでいるグループもあった。後者のグループでは執筆権限を全てのメンバーに付与した Google ドキュメントをいわば共同作業場として活用していた。このグループのアイデアにヒントを得て、受講生がグループワークを実感できるように共同作業場を設置することにした。これは“Digital Learning Playground (DLP)” (Chen et.al., 2012) と呼ばれるものに相当する。

2.2. 共同作業場の設置¹

受講生をそれぞれのブレイクアウトルームに配置しても、それだけでグループワークが始動するわけではない。それは対面が出来る状況の中でグループ別に着席することと同じでしかないからである。Zoom によって疑似的な対面状況を作ることができるようになったので、以後のグループワークをよりよく進めるため、遅ればせながらではあったが複数回の GWT を試みることにした。GWT を実施するにあたっては、体験を通して大切なことに気づく楽しさを感じてもらうために、ゲーム的な要素を加味し、メンバー全員で情報を交換・共有・確認しながら協力してゴールにたどり着くワークを考案した。その際、共同作業をするための「場」として、メンバー全員が執筆権限を共有する Google スライドを活用することにした。

最初に作成したのは、メンバーが1から100までの数字が書かれたカードを引き、その数の大きさを何かに例えて他のメンバーに伝え、その中で一番小さい数字を持っていると考えた人から順番に自分のカードを開いていくというゲームである。数字そのものを口にする事は許されず、その大きさを例えば動物に準えて「自分の数字はノミ相当」あるいは「自分はシロナガスクジラです」というように伝える。互いの数字の大きさを比較す

るために、何度も情報を交換しては確認しながら、全員が無事全てのカードを出すことを目指すこのゲームは、グループワークに必要なことの発見につながり、かなり効果的な GWT となった。

この GWT で克服すべき点は、オンラインの状態で、どこから、どのように数字の書かれたカードを他のメンバーに見られずに引くか、そして自分が持っている数字が一番小さいと気づいたときに、それをどうやって他のメンバーにコールするかというところにある。それを可能にしたのが Google スライドである。

2.3. Google スライドの新しい使い方

まず、画面上部にあるリボンの中の「挿入」ボタンをクリックして「図形」の中から長方形を選んで数字カードを作成する。文字の大きさやその配置については編集する図形を左クリックしたときにリボンに現れるコマンドで操作する（必要なコマンドが現れない時には、右端の三点リーダー(…)をクリックする)。続いて数字カードをマスクするための図形を作成し、それを先に作成した数字カードに重ね、数字カードとマスク用の双方をクリックした状態（もしくは ctrl+A で選んだ状態）で、図の上にマウスを置いたまま右クリックをして「グループ化」を選ぶ（図1）。このようにして作成した100枚のカードを2~3枚のスライドに分けてランダムに並べればゲーム場 (Playground) が完成する（図2）。このゲーム場をグループの班数だけ用意し、それぞれの URL アドレスを各グループに伝えた。

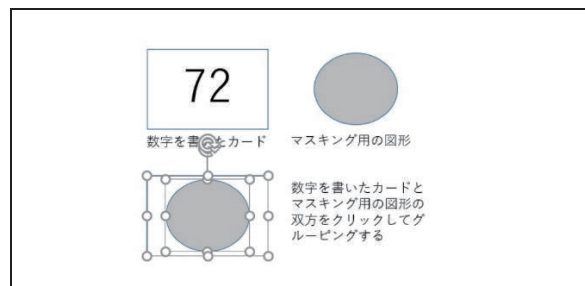


図1 数字カードのマスクング

(※上段は、作成した数字カード (72) とマスクング図形 (楕円) を示してある、下段はこの二

種類の図形をグループ化しようとしていることを示している。)

1	59	28	40	72	98
15	36	67	●	●	●
●	●	●	●	●	●
●	●	●	●	●	●
●	●	●	●	●	●

図2 GWT用ゲーム場作成のイメージ図

(※1から100までの数字カードをランダムにならべ、それぞれにマスキングを施していく。)

GWTの第1ラウンドでは、メンバーが1枚ずつカードを引いていく(2ラウンド目には2枚、3ラウンド目には3枚をそれぞれ引く。引く枚数が増えるほど難度が高くなる)。その引き方は画面上で引きたいカードにマウスを合わせて右クリックをして「切り取り」を選び(もしくは「ctrl+x」を操作し)、そのカードを切り取る。切り取ったカードを自分のPCのWordもしくはPowerPointに右クリック(もしくは「ctrl+v」の操作)で貼り付けると、数字だけを見ることができる。情報環境によっては、この作業ができない受講生がいたが、ZoomのメインルームにLAと共に戻り、LAがその作業を代替することで問題を解決した。各々が数字を見ながらメンバーと数に関する情報を交換しては、その大小を推測していき、自分の出番だと思ったら、さきほど貼り付けた数字を再度、切り取って、Googleスライド上に用意したスペースに貼り付ける。その数字はメンバー全員が見ることができる。

2.4. 共同作業場に対する受講生の感想

オンライン授業でGWTを実施するために施した工夫については、受講生より数多くの感想が寄せられた。その中の一篇を紹介する。

「ピアサポートのためのクリティカルシンキング」をオンラインで受講し、この授業ではオンライン

上でできることを最大限に活かした内容を提供してくださったと感じます。先生はZoomやGoogleスライドなど、オンタイムの会話や同時に一つの材料を皆で扱えるものを使うことによって、離れていながらも他の学生と共同作業ができ、できる限り対面授業で得られる時間と近いものを提供してくださいました。カードを一枚ずつ他人に見られないように引くという場合でも、それをオンラインでできるように工夫し製作してくださったことには「オンラインでもここまでできるのか」と驚きました。最初は、この授業は対面で受けるべきだと思っていましたが、進んでいくにつれて、毎週画面越しにグループのメンバーと共同で何かを解決したりすることが楽しくなっていき、今ではオンラインでの授業に満足しています。そして、このような結果となった要因としては、先生の工夫が一番にあげられると思います。受講生の意見を聞きながら、対面授業と近いものを提供できるように工夫してくださった先生に感謝しています。」

2.5. グループワークを支えるLA

共同作業場を設置し、GWTを幾度か重ねた結果、オンライン授業においても面接受業時と同じようにグループワークを展開することができるようになったが、そこには科目担当者による創意工夫にまさるLAの貢献があった。

4名のLAが6班のグループワークを週ごとに担当を交代して支援してくれたのである(残りの2班はサバティカルを利用した他大学からの客員研究員と筆者がワークを支援した)。また日によっては、ワークの進捗状況に鑑み、授業の途中で担当するグループを移動することもあった。Zoomでは、LA全員に共同ホストの権限を付与し、ブレイクアウトルーム間の移動ができるようにした。授業が終わると、必ず自分が担当したグループの様子を他のLAならびに教員に伝えてくれた。こうして次の対応について必要な情報を交換・共有しながら、グループワークをつつがなく展開することができたのである。

2.6. 共同作業場がもたらす新しい可能性

LMS だけを利用する場合にも、LMS と Zoom を併用する場合にもグループワークを実施することができたが、当然のことながらワークのクオリティは後者の方が高い。ここに共同作業場を加えると、ワークのクオリティは格段に高くなる。図3は共同作業場を設置することによって、パーソナルワークや授業時間外の利用の可能性が広がることを示したものである。

	LMS	Zoom	Googleスライド /ドキュメント
Real time 授業時間内	④ 非結合型パーソナルワーク	① LMS + Zoom + Google スライド Group work (GW)	
Anytime 授業時間外		Zoom Party ⑦	② 時間共有に 向けた ③ 結合型パーソナルワーク

図3 共同作業場によって広がる可能性

図中、①は既述した LMS と Zoom ならびに Google スライドを併用したグループワークを示している。先に、セメスターの序盤には LMS だけを利用している際にもグループワークを実施したと述べたが、言葉を交わさない状態でのグループワークは極めて不自然であるし、その後に展開したグループワークとはクオリティが比ぶべくもないので、LMS だけを用いるのはパーソナルワーク (PW) に限ることにした (図中④)。「非結合型パーソナルワーク」とは、受講生が各自の PW を共有することが(でき)ないという意味である。

しかし Google スライドや Google ドキュメントを例えば課題のテーマ別に作成して援用すれば、PW の共有が可能になる。このような PW を結合型パーソナルワークと呼ぶことにする (図中③)。受講生は個人作業に取り組む場合であっても、他の受講生の学習の進捗状況を見て知ることができるので、自らの学びは必ず刺激を受ける。

また授業時間外でもメンバーが集う時刻をあらかじめ決めておけば、ほぼ同時にスライドやドキュメントに書き込むことができるようになるので、

グループワークに近いものを体験することもできる (図中②)。

なお図中⑦は授業時間外に授業内容を離れて相互にコミュニケーションを楽しむ機会を示している。

2.7. 春学期を振り返って

LMS を利用したオンデマンド型の授業でもリアルタイムの授業展開を呼びかけ、タイムラインを活用し、Author の権限を付与した LA に支援してもらうことで、授業が無味乾燥になることを回避することができた。

グループワークを展開する際には、LMS で課題を示し、Zoom でバーバルコミュニケーションをとれるようにするほか、Google スライドなどを利用して共同作業場を開設すると、ワークを滞りなく進めることができた。共同ホストの権限を付与した LA が面接授業の時と同じように複数のグループを見回り、ワークを支援してくれたことで、面接授業と比べても遜色のないグループワークを実現することができた。

さらに、オンラインでの GWT のためのコンテンツを複数作成したので、秋学期以降の授業準備は万端整った。

3. 秋学期の苦悩とその克服

ところが 2020 年度の秋学期には面接授業を原則とするという方針が掲げられ、春学期に蓄積したオンライン授業のノウハウを活用する機会が奪われてしまった。筆者は基礎疾患を有しているため、遠隔授業申請が認められたが、大学より示されたのは、一方向的な講義形式を前提とするオンデマンド型の授業形態であり、グループワークを主軸とする筆者の授業は、その実施が困難なものとなった。

単なる知の転移はおこなわず、学習者が自ら知の構築を体験できるようにする学習パラダイムを志向している筆者は、受講生に複数の選択肢を示すことで、この難局を乗り越えようと試みた。

春学期と同様に、作文系の 2 科目は学期の前半

に LMS に基づいたパーソナルワークを、後半に Google ドキュメントを利用したパーソナルワークを実施することにした (表 2)。いずれも LA がタイムラインに適切な指示を出したり、受講生の質問に応えたりしてくれた。

秋学期は、面接授業とオンライン授業とが混在しているので、同じ日にその双方の授業を受ける学生は、出校する必要があるため、時間割通りの時間帯に自宅など学外でオンライン授業を受けることができない。まずはこのことに配慮し、参加する時間帯を問わないオンデマンド授業という選択肢を用意する必要があった。オンデマンド型授業の場合、グループワークは不可能なので、この形態を希望する受講生はパーソナルワークをすることになる。そこで残りの 3 科目については、受講生にリアルタイムでのグループワークか、時間の制約を受けないパーソナルワークのいずれかを選んでもらうことにした。

表 2 2020 年度秋学期の授業形態の概要

科目名 (略称)	受講者数	課題解決の様態
大学教育論	14	パーソナルワーク : LMS
	15	グループワーク : Zoom+Coggle
作文プロジェクト	23	パーソナルワーク : LMS ペアワーク : Google ドキュメント
文章の達人を目指す	18	パーソナルワーク : LMS ペアワーク : Google ドキュメント
水平思考プロジェクト	13	パーソナルワーク : LMS
	10	グループワーク : 教室+Zoom
クリティカルシンキング	8	パーソナルワーク : LMS
	10	グループワーク : 教室+Zoom

次に配慮しなければならなかったのは、グループワークをどこで展開するかということである。

オンラインでグループワークをする場合に、受講生が学内でそのワークに参加することに配慮する必要がある。大学でオンライン授業の視聴が許される教室では静謐を守らなければならないため、

そこではグループワークに参加することができない。大学にてオンライン授業におけるグループワークにリアルタイムで参加するためには、発声してもよい場所が必要である。そのために当該科目の受講生だけが使える教室の利用をお願いして場所を確保した。

「水平思考プロジェクト」と「クリティカルシンキング」の 2 科目において、教室でのグループワークを希望する受講生がいたため、同様に教室を確保し、教室と筆者とを Zoom でつなぐことにした。なお、教室には LA が出向いて、グループワークの支援をおこなった。

よりきめ細かな配慮をしなければならなかったのが「大学教育論」である。このクラスでは選択肢を 7 つ用意し、受講生の希望を尋ねた (表 3)。

表 3 大学教育論における授業スタイルの選択肢

PW	LMS で毎回提示される課題に取り組む		13
	独自にテーマを設定し、取り組む		-
	統一テーマに取り組む		-
GW	グループ別にテーマを設定	LMS+ZOOM+Coggle	8
		LMS+Coggle	-
	統一テーマに取り組む	LMS+ZOOM+Coggle	7
		LMS+Coggle	1

パーソナルワークには 3 つの選択肢を、グループワークには 4 つの選択肢を用意した。表中、「独自にテーマを設定する」とあるのは、具体的には「関西大学をよりよい大学にするための企画」のことである。統一テーマとは「オンラインと面接のよりよいハイブリッド授業を目指す企画」のことである。普段は設定しない統一テーマを設けたのは、春学期に LA を務めた学生が、学期の途中に次の感想を寄せてくれたからである。

「オンライン授業が始まってから約 2 か月、学生・先生・LA それぞれが試行錯誤しながら、初めての状況に適応しています。正直 4 月時点では、オンライン上で授業やグループワークができるのか不安しかありませんでした。しかし、Zoom・関大

LMS・グーグルドキュメント等の様々なツールや関係者全員がこの状況におけるベストを尽くしたおかげで、対面授業と近い形で授業運営ができたと考えています。秋学期以降、対面授業に移行できるかはまだ不透明ですが、コロナ禍での経験が対面授業に新しい風（関大 LMS の継続的な活用や授業運営方法の変更など）を吹き込むのではないのでしょうか。」（経済学部 4 年生）

パーソナルワークでは、この独自テーマ、統一テーマのいずれにも希望者がいなかったため、新たに個人で取り組む課題を作成しなければならなかった（正確には、そのような事態が発生するのを見込んで、あらかじめ新たなコンテンツを用意してあった）。

グループワークも同様に、独自テーマか統一テーマのいずれかを選んでもらったが、その際、情報環境に大きく左右される Zoom の使用の可否を尋ねることにした。その結果、グループ別テーマを選択した受講生は Coggle（マインドマップを作成するためのツール）を共同作業場としながら Zoom で参加する形態を選んだ（共同作業場は最終報告に向けて、途中から Google スライドに移行した）。統一テーマを選んだ受講生のうち、1 名だけが Zoom を使えない環境にあったが、1 名ではグループワークが成立しないので、本人の意向にしたがってパーソナルワークに取り組んでもらうことにした。メンバー全員が他の時間帯の面接授業のために登校しているグループがあったが、教員や LA とコミュニケーションをとるために、受講生は同じ教室にしながら Zoom と Coggle や Google スライドを利用して、グループワークを展開した。

この科目で編成したグループの数は 4 班、配置した LA は 4 名だったので、LA は十分にグループワークの支援をすることができた。

4. LA の意見・感想・提案

春学期、秋学期ともに LA の活動、活躍があったために、不自由な環境の下でも、グループワークを展開することができた。受講生と同様に、初

めてのオンライン授業だったにもかかわらず、見事なまでに受講生の学びを支援してくれた。受講生の中には、その LA の支援活動の様子を見て、自分も LA をやってみたいと考えてくれる者もいて、通常の面接授業時と変わらぬ連鎖も生まれた。その LA にオンライン授業で学習支援をしてみて、感じたこと、考えたことなどを書いてもらった。全員のレポートを掲載するのは紙幅の関係上、断念せざるを得ない。かといって、抜粋するだけでは、LA の細やかな息遣いが失われてしまう。そのように考えて、3 名の LA が寄せてくれた意見・感想・提案を以下に示したい。

私が二学期間のオンライン授業を通して、感じたことは主に 2 つあります。

1 つ目は、LA の存在の必要性です。LA をしている自分が言ってしまうと良いものなのか少し疑問がありますが、オンライン上でグループワークをする上で LA の存在はとても大きな意味を果たしていると思います。私が担当させていただいている授業はグループワークが授業時間の主体になっているので、受講生同士で会話をしてもらわなければいけません。しかし、授業の様子を見てみると、オンラインと言うこともあり、なかなか話し合いが始まらないことも多くの班で見受けられました。受講生であれば、「これから 15 回の授業を共に話し合っていくメンバーに厚かましく思われたくない」、実際に会った事がないひとなので、「相手がどのような人なのかわからない」、そんな思いから他のメンバーになかなか声をかけられなかった人もいるのではないのでしょうか。そこで LA という立場の私たちが初めはブレイクアウト兼班員同士の橋渡しを行ったり、授業が進んでいったら立ち止まった時にアドバイスをしてあげたりすることで全員が初めての経験をしていながらも“授業”の形作りを受講生とともに行うことが出来ているのではないかと自負しています。

2 つ目はオンラインだからこそ起こり得るコミュニケーション上のすれ違いです。まずは授業内容について。私たち LA は毎年同じ授業を行って

いることもあり、昨年度までの授業形態を前提として進めてしまっている部分があったと思います。しかし、前・後期の授業を通して、オンライン上では、私たちの意図がなかなか細部まで伝わりにくいと感じました。例えば、最後の授業で発表することを第5回授業あたりまで受講生が理解していなかったということがありました。また、LAの立場からすると、私たちは毎週違う班についているので、その日自分たちが担当しなかった班の進捗状況には正直不透明な部分があります。しかし、受講生は毎週同じメンバーで話し合っていますので、発表内容についての理解度が大きく異なります。サポートする立場である私たちが、受講生が行なっている事に対する理解度が低い状態では上手くアドバイスができないと思います。私はこれがZoom上でグループワークを行う難しさの1つだと思います。(商学部3年)

【春学期】

水曜3限「クリティカルシンキング」

対面でも初対面の人と打ち解けるのに時間がかかる学生さんがいるのに、そこをどう埋める？と考えた結果、LAがMCになることだ！と思いました。グループ内でもお互いを理解しきれていない(どんな人だろう…とか)と感じることが多かったので、LAが積極的に学生さん1人1人の話を引き出してあげる・話を振る必要があると思いました。Zoomでは声、顔、背景しか分からないし、圧倒的に視覚情報が少ないことが相手への関心度を下げ一因になっているのではないかなと思っています。

今まではグループワークのファシリテーションが中心でしたが、オンラインでは特にグループで何が起きているのか以上に、個人のサポートが必要だと感じました。

また、授業の内容としては、アイスブレイクに時間をかけるのがいいのかとは思いつも、授業の本題には早くうつらなければいけないし、その線引きが難しかったです。ただ会話が止まると、何に悩んでいてどういう風にアドバイスしてあげ

ればいいのか分からないこともありました。グループのメンバーもお互いに何を考えているのか、意見の共有ができないことがネックだったと言っていました。そこに関しても傾聴の姿勢が大切だと思いました。これに気付いてもらえるように、LAが率先して話を聞く姿を見せることで学生さん自身に授業を通して伝えていきたいと思いました。

【秋学期】

水曜1限「大学教育論」

春学期の「クリティカルシンキング」とは違い、全15回の授業で1つのテーマ・課題に対して取り組むので、LAとしても前回は何を話しあっていて、今日は何に取り組むのか、授業後には次回の予定を聞くなどして、質問が投げかけやすくグループの雰囲気に馴染みやすかったです。春学期の反省(話を振ることに注力しすぎていつもより私が喋りすぎてしまったこと)を踏まえて、見守ることも大事にしました。LA4人でうまく4つの班をローテーションでき、今学期からは学校にも通えたのでLAの皆のリフレクションシートで各グループの進捗状況を確認出来てよかったです。

また、グループをみることも大事ですが、オンラインだからこそ個人個人にコミュニケーションを取ることやグループの皆が共通の会話が生まれる話題など(1回生が多かったので新生活、大学生活のことなど)を楽しく話せるようにグループの雰囲気作りを心がけました。学生さんがオンラインに慣れてきたお陰もあって、意思疎通が少しずつできるようになってきました。

授業内容に関しては、まず学生が授業形態・課題を選択できる配慮が本当に良かったです。まさに、「選択肢を最後まで残す」という先生の指針通りだなと思いました。そもそもコロナで思うような授業を受けられなかったり、描いていた大学生活を送れず不満がつのったりする中で、少しでも学生が好きなように学べる配慮はありがたかったと思います。

また、オンライン授業と対面授業のハイブリッド型を考えるテーマは非常に面白いと思いました。

まさに大学の主人公である学生が議論すべき問題です。大学で学ぶという受動的な姿勢より、大学をよりよい方向に変革してやるというアクティブな考えを養えることが何よりも有意義だと思います。(社会学部4年)

秋学期の授業では、リアルタイムでLMSにアクセスする学生が春学期に比べて少なかったように思います。オンデマンド型の授業(学生が対面かオンデマンドかを選ぶことができるタイプの授業を含む)では、自分の好きな時間にLMSにアクセスして学習することはもちろん認められています。ですが、アクセスの時間が異なると、授業中のコミュニケーションにラグが起こってしまいます。受講生の質問等への回答に時間がかかるということも問題なのですが、従来よりも受講生とLAの接点が薄くなってしまふことに危機感を覚えました。LAのサポート活動は、受講生との対話(質問や雑談)や様子を見ることを通して行われます。受講生がいてこそ、LA活動です。LAは決まった時間帯にアクセスしていますが、受講生は必ずしもそうではありません。このような場合に関しては、LAの運用方法も変化させる必要があると思います(どのようにすべきかについては模索中ですが…)。(経済学部4年)

面接授業時には、他のLAの活動の様子を観察することができるため、いわゆる **on the job training** が可能であるが、オンライン授業時にはそれぞれが困難であるため、今後のLA研修では、この1年間の経験を持ち寄って、オンライン授業時におけるサポートの仕方をテーマにする必要がある。他の教員の指示下で勤務したLAにも感想や意見を求めていきたい。

註

¹本セクションと次のセクションの内容は、『リスク社会を乗り越える大学教育のデザイン』(関西大学出版、近刊予定)の内容と重複するが、紙幅の関係で著せなかった内容を付記してある。

参考文献

- Chen, G. D., Chuang, C. K. Nurkhamid, Liu, T. C. (2012) When A Classroom is not just a Classroom: Building Digital Playgrounds in the Classroom. *The Turkish Online Journal of Educational Technology*. 11(1), 202-211
- 三浦真琴(2018)『グループワーク その達人への道』医学書院。